



## ■ 第2回 SPARC Japan セミナー 2013

### 「人社系オープンアクセスの現在」

2013年8月23日(金) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:95名

2013年第2回 SPARC Japan セミナーは、人文・社会科学分野のオープンアクセス(OA)に焦点を当てた最初のセミナーとして開催されました。研究者の視点・海外および日本の動向をそれぞれ当事者から報告いただき、その後登壇者全員で「人社系 OA の“これから”」をめぐるパネルディスカッションが持たれました。初めての試みのため話題は多岐にわたり、議論は次第に熱を帯びました。今回のセミナーを嚆矢に、人社系 OA の諸課題をより深く掘り下げていくことが今後期待されます。参加者は大学図書館員、出版者、研究者等、計 95 名でした。当日の配布資料等含め詳細は SPARC Japan の web (<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130823.html>) をご覧ください。セミナー概要は以下のとおりです。

#### 【経済学と経済学者にとってのオープンアクセス】

青木 玲子(一橋大学経済研究所)

経済学の特定分野においては OA 誌の登場以前にも、ワーキングペーパーにより学術情報の交換が行われていた。オープンアクセスの在り方として、情報は排他性がなく、消耗しない性質であることから、無料で提供することが効率が良い。よって、経済学的視点から見ると OA 誌は理に適っているといえる。また、経済学には two-sided market という用語があり、売り手と買い手など立場の異なる二者間の利益をマッチングさせるこのモデルでは、費用負担は双方いずれでも成立する。同じく学術誌を two-sided market と捉えた場合、費用負担は情報発信者・受信者のいずれでも、あるいは両方でも構わないことになる。

#### 【歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス

##### — 日本近現代史研究の現場から —

石居 人也(一橋大学大学院)

歴史学研究の伝統として、原典や手稿など一次史料への偏重があった。また、歴史学の研究者の生態として、史料として形あるものへの執着心があり、出版文化への親近感を生む原因のひとつとなっている。速報性よりも確実性が重視されることも歴史学の特徴である。以上のように OA に対する歴史学のニーズは全般的に高いとはいえないが、変化の兆しはある。例えば 1990 年代後半、実証型から解釈型の歴史学へと移行する動きが見られた。後者では検証可能性の担保がより重要視されるため、典拠情報へのアクセスに関心が向き始めた。また技術的な研究環境も変

化し、一次資料をウェブ上で公開したり、目録を以前より早い段階でワーキングペーパーとして公開したりする向きは加速している。

#### 【海外の動向:人社系 OA 誌の最前線】

Martin Paul Eve (Open Library of Humanities, OLH)



##### 1. OA の背景と問題点

1986 年以降現在に至るまでの英国の消費者物価上昇率は全体で 80%だが、ジャーナルのそれは 380%にも達しており、よってジャーナルの購読はもはや持続不可能である。大手出版社は莫大な利益を得ている一方、学術論文にアクセスできない研究者がいる。加えて、高評価の故に高額になってしまったジャーナルの問題がある。

##### 2. 社会的な課題

論文が投稿され、査読され、評価が高まるという流れは OA 誌になっても変わることはない。OLH においても従来の方法を踏襲することとして、国際的に著名な研究者・専門家を運営委員会のメンバーとして招いている。保守的・

伝統的な方法により質を担保しつつ、成果を目に見える形にできた時点で、段階的に革新性を持たせていきたい。人社系の論文刊行に主眼を置きつつも、モノグラフ(専門書)も無視できないため5年間の時限的なプロジェクトとして出版者4者と協力してOA出版を実現する予定である。

### 3. 技術的な課題

特定分野の専門家が中心となり、評価の高いジャーナルからすぐれた論文を選び出して「オーバーレイジャーナル」とし、これをメガジャーナルの上に構築することを検討している。また、人社系の研究者は、デジタル保存の耐久性を不安視する傾向があることから、LOCKSS、CLOCKSSなど安定性と耐久性を兼ね備えた技術を活用することを考えている。

### 4. 財政的な課題

このプロジェクトのコストは、モノグラフの出版費用も含めて、5年間で約260万ドルと見積もっている。まず寄付を募り、次に自立的な運用を目指す。

## 【「学術情報」と「体系的な知」のはざままで —大学出版の模索—】

鈴木 哲也(京都大学学術出版会)

京都大学学術出版会では5年前から出版物を実験的に京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)に無償掲載するというプロジェクトを行っている。グリーン・ゴールドというOA全体を考えたときに、必ずしも人文系が自然科学系に遅れているわけではない。とはいえ、学術書としての紙の本は、体系的・総合的な知を身につけさせるものとして重要であるにも拘わらず、従来の学術出版はそのニーズに応えていなかったという問題がある。本にするものとしなものの仕分け、本・雑誌・OAの棲み分けが必要である。OAのビジネスモデルの確立もまた困難な課題として残されている。

## 【パネルディスカッション

### 「人社系OAの“これから”」



モデレーター: 蛭名 邦禎(神戸大学大学院)

パネリスト: 青木 玲子(一橋大学経済研究所) / 石居 人也(一橋大学大学院) / Martin Paul Eve (Open Library of Humanities) / 鈴木 哲也(京都大学学術出

版会) / 松本 和子(慶應義塾大学理工学メディアセンター)

冒頭、松本氏より、大学図書館の視点として、人社系の図書館の状況、人社系研究者の資料へのアプローチや、この分野における電子化の現状、国の取り組みとして科研費の成果のOA化を促進することなど、多岐にわたる話題が提供された。

続いて、モデレータの蛭名氏より、①OAの現状: 本来に人社系のOAは自然科学系と比べて遅れているのか、研究分野により研究手法が異なることによる問題ではないのか、②OAの目的: 学術研究の推進と学術成果の還元をどのように考えるか、③研究者の育成、④学術コミュニケーション: 研究者と一般市民という異なる情報の受け手をどのように考えるのかなど、講演・話題提供の内容をふまえてのまとめがなされ、フロアも交えて、ディスカッションが進められた。

まず、青木氏からは、OAでは、学術情報の流通それ自体が重要なのか、あるいは学術成果の評価のため、より合理的な出版形態が求められているのかなど、何をOAに期待するかによって論点は変わってくるのではないかという意見があった。

続いて、石居氏からは、歴史学は速報性よりも確実性を重視する学問だが、科研費のように期間を区切った中で成果公開も必要であり、助成を受けている研究成果とOA化との親和性は高いとの意見があった。

一方、Eve氏からは、成果は広く社会に還元されるべきものであるにもかかわらず、学術情報が取引される市場は出版者の独占状態にあるとの発言があった。

鈴木氏からは、紙の本の優位性はディスカバビリティにあり、ピンポイントで利用される電子より偶然の発見を引き出しやすいとの発言、またOAにナビゲーションできる機能を付加する方法があるとの発言があった。

松本氏は、図書館では人が少なくなってきた中で人材育成は大きな課題であるとして、研究者のみならず図書館員の育成の問題にも言及した。

フロアからも活発に意見や質問が出された。一例を挙げると、紙媒体で利用された資料をOAまたは電子で安く再利用できる方法はないかという質問があり、これに対しては、電子と紙とは異なる機能を持つことから相互補完的な関係にあり、むしろPDFの存在が紙の本の価値を押し上げるなどの回答があった。

パネルディスカッションの後半では、学術コミュニティと一般の人々のリテラシーの問題が取り上げられた。換言すればOAの受け手をどのように考えるかという問題である。

鈴木氏は、本は何のためにあるのかということを明確にするとリテラシーは必要であり、出版者がコンセプトを

明確にすべきであると主張した。

Eve氏は、まず資料を提供しなければリテラシー能力も向上しないとした。

石居氏からは、OAを前提とする場合・しない場合では情報の受け手が異なるため、これを意識して執筆していること、また、学術的コミュニティに限定して公開するもの、広くオープンとするもの、それぞれの場合において関係者の同意を得ることが必要であるとして、情報受信者との関係性にも言及した。

OAの目的という根本的なトピックに始まり、リテラシーの問題に至るまで、人社系OAに関わる諸問題を浮き彫りにしつつ、パネルディスカッションは白熱のうちに終了した。



## -----参加者から-----

### 今回の内容について

(大学/学術誌編集・図書館関係)

・複数の立場からOAについて述べられていて、とても勉強になりました。

(大学/図書館関係)

・図書館がOAに係わってゆくポイントが明確に語られていた。

・青木先生のtwo-sided marketの話が面白かった。

OAに期待するもの、目的がはっきりしないとコスト負担者が決まらないとのこと。また、本の意義、紙への偏重といった人文の特徴やOAでのかき分けの話も印象に残りました。

(大学/大学・教育関係)

・人社系に特化しており、興味深く参加できた。

・様々な人文社会系の学術流通を担う方々の講演が聞けて大変勉強になりました。

・人社系OAの現状を海外の動向を含め整理することができました。

(大学/研究者)

・この種の話が多面的に聞く機会は重要でしょう。さらにcomprehensiveな状況説明が必要だったのかもしれませんが。電子化とOAの話が入り混じっていた印象があり、その点でMartinさんの話は興味深かった。

(企業/学術誌編集関係)

・OA化をめぐる費用の問題を経済学的観点からお話を伺えると期待していたが、異なっていた。

(その他/図書館関係)

・発表者のOAの対象が違ったため、問題点の絞り込みがむずかしかった。

### その他、当企画に関する意見、感想

(大学/図書館関係)

・もっと人社系を中心にしたテーマを取り上げて欲しい。

・人社系OA誌のコスト負担者、ビジネスモデルが気になります。

・OAについて1年をとおして学ぶことができる有意義な企画と思います。



## -----企画後記-----

😊 オープンアクセスに関する議論は増大・多様化し、現状把握もままならないのが正直なところ。おそらく国内初となる人社系OAセミナーでは、話題整理にもっと時間を割いたほうがよかったのかもしれませんが。しかし研究者・出版者・図書館員・OA出版発起者といった「各当事者」から現場の率直な声を聞くことができ、次の企画につながる視点がいくつか提示されたことはスリリングな体験でした。

一橋大学附属図書館 福田名津子

😊 セミナーの企画もさることながら、今回楽しかったのはチラシの作成。人社系OAがこれから伸びていくイメージで緑を基調としました。表のデザインは葉脈にも見

えますが、実は...裏面はある夏野菜をモチーフに。

早稲田大学図書館 今村昭一

😊 正直、オープンアクセスって何？の状態引き受けてしまったことを後悔していました。案の定、準備から本紙のまとめまで、福田先生、今村さんに頼りっきりになってしまい申し訳ございませんでした。

印象に残っているのは、プロジェクトの進め方でした。正直、顔合わせもなくメールだけで作業を進める方法には最後まで...戸惑いっぱなしでした。

慶應義塾大学メディアセンター本部 島田貴史